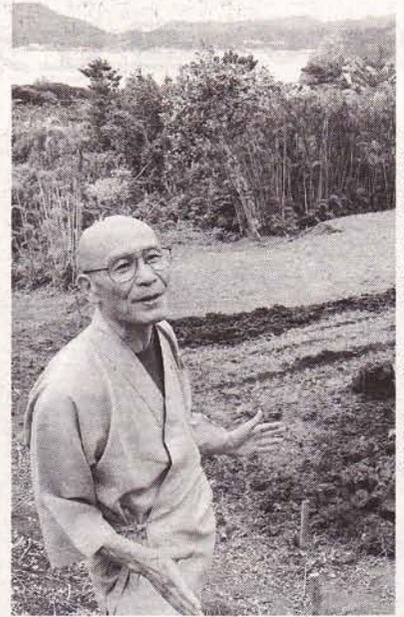


東京都心から南へ約1000キロ。太平洋に浮かぶ小笠原諸島の父島に、昨年12月、島でただ一つの寺が建立されました。

名は行行寺。浄土宗の寺院です。紺碧の海を見下ろす山腹にあり、吹き下ろす風がヤシの木の葉をサラサラと揺らします。耳に届くのは、風と波の音と鳥のさえずりだけという本堂で、住職の吉田一心さん(63)が動行に励んでいます。約700キロ南の太平洋戦争の激戦地、硫黄島に向かつて、慰霊の祈りを続

父島で戦没者の冥福を祈り続ける吉田さん(東京都小笠原村で昨年5月撮影)



硫黄島へ慰霊の祈り

の空襲で焼失しました。米軍に占領された小笠原諸島が68年に返還された後も再建されず、僧侶の不在が続いていたのです。電話の5か月後、森下さんの叔父が生まれた硫黄島で法要を営むことが決まり、吉田さんらは、小笠原村主催の墓参団に同行して島に渡りました。

めたのです。島で戦没者の回向を続けよう。幸い、寺の跡継ぎもいるし、娘2人も独立した。身軽なわしが行かずに誰が行くのか。人口約2000人の父島に移り住んだのは03年12月。同時に正明寺(堺市)の副住職、森俊英さん(45)ら仲間が支援活動を始めました。「父島に新寺建立」

かげさま」できているのです」と言います。硫黄島は周囲22キロの小島です。政府は51年以降、遺骨収集団を60人以上派遣していますが、それでもなお、1万2000体の遺骨が眠っています。昨年5月、吉田さんは観光協会が企画した島への旅に参加し、船上から鎮魂の念仏を唱えました。「お父さん、のどが渇いたでしょう」と水を献じる人、涙を浮かべながら無言で島を見つめる人……。同行の遺族らの姿に触れて、「戦争はまだ終わっていない」と痛感したと言います。

大(京都市)通信課程で学びました。3年後に僧侶の資格を得て、跡継ぎのいなかった三重県鈴鹿市の寺で住職になったのです。檀家28軒。落ち着いた日常を変えたのは、父島のダイビング仲間、森下秀夫さん(55)から2002年1月に入った電話でした。亡くなった叔父の葬儀を執り行ってくれませんか。かつて島には寺が二つあったのですが、1944年の空襲で焼失しました。米軍に占領された小笠原諸島が68年に返還された後も再建されず、僧侶の不在が続いていたのです。電話の5か月後、森下さんの叔父が生まれた硫黄島で法要を営むことが決まり、吉田さんらは、小笠原村主催の墓参団に同行して島に渡りました。

死闘を展開し、日本兵2万129人、米兵6821人が戦死した地。海に面した岩々に無数の弾痕が残り、朽ちた大砲や銃砲が無残な姿をさらしている。法要の後、18キロ及ぶ地下壕を歩き、硫黄島が漂うその壕で幾多の命が失われたと聞いて、戦争の悲惨さを思い知りました。鈴鹿に帰ってから、父島や硫黄島の文献を読み進め、心に決

を広げます。4年近くの間に学校や福祉施設で約200回の法話会を催し、ときには街頭に立って硫黄島の惨禍を訴えました。寄せられた浄財は数千万円に上り、行行寺建立にこぎつきました。「島に来て

も感謝ばかり。世間は『お

慰霊の旅はまだ、始まったばかりです。

父島の寺

読売新聞 H 20 2.17 朝刊 29面 (肉西版)

読売新聞

読売新聞大阪本社
第19776号

〒530-8551
大阪市北区野崎町5-9
電話 (06) 6361-1111 (代)
http://www.yomiuri.co.jp/

毎週日曜に掲載します。郵送は〒530・8551 (住所不要) 読売新聞大阪本社社会部泉係。F A X 06・6361・3065。Eメールはosaka2@yomiuri.com。

計画停電

医療機関は対象外

関電副社長 「配電線単位で対応」

関西電力の岩根茂樹副社長は29日の大阪府・市統合本部のエネルギー戦略会議後、記者団に対し、今夏の実施準備を進めている計画停電について、「基本的に配電線単位になる」と述べ、医療機関を計画停電の対象から外すことができるとの見方を示した。

関電は工場や鉄道など大口顧客向けには変電所から直接送電している。住宅や事務所、中小規模工場などには、配電線を通じて送電しており、よきめ細かな対応ができるという。

一方、同戦略会議では、府市の今夏の節電対策として、電力需給が逼迫した場合には、庁舎内で冷房や照明、パソコンの電源を切ることを検討していることが明らかにになった。区役所窓口などでパソコンを切ると住民サービスに影響するた

め、対象部署など詳細な検討を進める。

また、府市は、電力需要がピークとなる平日の午後一斉閉庁することも検討したが、「住民サービスが大きく低下する」として断念。代替策として、職員に午後の年次休暇の取得を奨励する方針という。



5年ぶりの再会だった。

東京・小笠原諸島、父島の僧侶・吉田一心さん(67)。大阪で

開かれた子ども水難事故防止講習会で講師を務めるため、はるばるやって来た。「再びこの分野で仕事をすることはないと思っていたが、事故が絶えないのが気がかりで」と言う。

ダイビングスクールの校長から仏の道に転身。寺がなかった島に移り住んで新寺の建立を目指していると聞き、取材で島を

道仏のぐん防難水

訪れたことがある。その後、多くの支援で無事に寺は建ち、悩みを抱えた若者らが全国から集まるようになった。

一心さんによると、泳げる子どもでも浅瀬で水死することがある。息継ぎのタイミングを間違えて、鼻や口から水を吸い込み、鼓膜の奥で出血して平衡感覚を失う可能性があるという。

「誰でもおぼれる危険があることを知った上で、水遊びを楽しんでほしい」。坊主頭の南海の男は、今もやっぱり熱かった。

(敦)

2012.5.29